

皮膚科のトリビア

250

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」, そこから転じて「瑣末なこと」となり, 今では雑学的知識, 豆知識, などを意味する言葉として定着している。

本欄は, 小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ, 連載しています。ご意見等ございましたら, ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第54回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会から

令和6年12月21日

抗NXP2抗体陽性皮膚筋炎は消化管穿孔に注意

60歳代の男性。頭部や頸部Vネック領域の紅斑, 手指関節背面の角化性丘疹, メカニックハンドがあった。抗nuclear matrix protein 2(NXP2)抗体が単独陽性。皮膚筋炎(dermatomyositis: DM)の診断でプレドニソロン(PSL)1 mg/kg/日が開始されたが, 頻回の腹痛の訴えがあり, 25日後に下血を生じた。その後も貧血の進行と血便が続き, 造影CTで小腸出血と診断された。免疫グロブリン静注療法(intravenous immunoglobulin: IVIg)併用で病勢はおさまり, 現在はPSL 8 mg/日を継続中。抗NXP2抗体は小児のDMでみられることが多く, 成人ではまれであるが, 陽性例では重度の筋症状, 浮腫, 石灰沈着を特徴とし, 間質性肺炎を併発するケースも多い。消化器症状は56例中10例で伴っていて, 血管障害による消化管穿孔も8例にみられた。

一言コメント

「成人の抗NXP2抗体陽性DMは重症化しやすく, 消化管症状に対する注意深い監視が必要。石灰沈着も血管障害が原因とのこと。」

●第54回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会から

令和6年12月21日

デュピルマブの効果に差異があった蕁麻疹の症例

10歳代の女児。IgEは145 IU/mLで正常, 5分の温浴で直後に膨疹と気分不快, 可視光照射で5時間後に膨疹, FricTest®で5分後に膨疹がそれぞれ出現し, 温熱蕁麻疹, 遅発性日光蕁麻疹, 機械性蕁麻疹併発と診断した。デュピルマブ投与を4カ月継続したがUCTは4点。再度の負荷試験では, 温熱負荷では変化なし, 光照射では7時間後に膨疹が出現し, 時間が伸びた。FricTest®では膨疹誘発なく有効。同一患者でも蕁麻疹の種類によって, デュピルマブの効果が異なっていた。

一言コメント

「個別な症例の治療効果についての講演だが, 同一の誘発テストを治療前後で行うことの重要性和その方法が明らかになったことに注目したい。」

●第54回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会から

令和6年12月21日

BASCULE症候群

BASCULE(Bier anaemic spots, cyanosis with urticaria-like eruption)症候群は2016年に初めて報告された発作性の血管運動性皮膚症。症例は自閉症スペクトラムがある10歳代男児で, 起立時に両下腿にピリピリとした感覚と痒みが出現するように

なった。皮膚症状は両下腿から足背にかけて、起立時に暗紅色斑が出現し、浮腫と中央にポツツとした膨疹様紅斑とその周囲に貧血性の白っぽい斑を生じて、痒みと痺れを伴っていた。症状は座位や歩行により消失することから、BASCULE症候群と診断した。自律神経系の機能不全や、一時的な血流調節不全による血管運動障害 (vasomotor disorder) の一種と考えられている。ピラスチンの内服で軽快している。

一言コメント

「初めて聞いた。一部の患者では、体位性頻脈症候群 (postural orthostatic tachycardia syndrome : POTS) やそのほかの起立性不耐症 (立ちくらみ、動悸、めまいなど) との合併が報告されているとのこと。」

●第54回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会から

令和6年12月21日

ニッケルを含む金属石鹸が原因だった、眼鏡フレームによる接触皮膚炎

金属フレームに樹脂を被覆した眼鏡による接触皮膚炎の症例。樹脂表面にキズはないが、中の金属部分は緑色に変色していた。変色した部分の蛍光X線分析でニッケルを検出、質量分析ではパルミチン酸、ステアリン酸が検出され、脂肪酸とニッケルが結合した金属石鹸であった。これが樹脂を通過し表面に達したため、ニッケルによる接触皮膚炎をきたしたと考えられる。

一言コメント

「石鹸とは、高級脂肪酸 + アルカリ金属 (Na または K など) のことで、アルカリ金属以外の金属 (Ca, Mg, Al, Zn など) を反応させたものは金属石鹸と定義されている。パルミチン酸などの脂肪酸は化粧品に含まれているので、金属石鹸を誘導することになるらしい。」

●第54回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会から

令和6年12月21日

部位別角層サイトカイン発現の検索

アトピー性皮膚炎 (atopic dermatitis : AD) の新規全身療法による治療反応性が、顔面と体幹で異なる場

合がある。部位によって病変部の角層サイトカイン発現が異なっているかどうか、中等度から重度のAD患者と健常人についてそれぞれテープストリッピングで採取した額と腹部の角層をサンプルとして検索した。AD群ではTP-10, MIG, IL-17などのTh1およびTh17が腹部より額で高い傾向があった。またTh2サイトカインでは、IL-13, IL-33が額より腹部で発現が高く、IL-4, IL-31は額でより高く、TARCやTSLPは額と腹部でほぼ同等であった。健常人でもほぼ同様の結果であった。

一言コメント

「よくデュピルマブで顔の赤みが引かないときに、抗IL-13に変更すると改善することがあるという話を耳にするが、額はかえってIL-4が腹部よりも高いということであれば、うまく説明できないようだ。」

●第54回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会から

令和6年12月21日

ステロイド軟膏の前塗りで薬剤性皮膚障害を予防する

進行性尿路上皮癌に有効性が高いとされる、エンホルツマブ ベドチン (パドセブ® : EV) は半数の症例で投与早期から腋窩や鼠径部に好発する皮膚障害をきたすことが知られている。治療開始時にstrongestのステロイド軟膏を腋窩、鼠径部に外用しておくことによってこの皮膚障害が予防できるかを、対照を白色ワセリンとする左右差比較で検討した。5名の被検者に対し、投与開始時から4週間、1日2回、右腋窩、右鼠径部にクロベタゾールプロピオン酸エステル軟膏0.05%を外用、左腋窩と左鼠径部には白色ワセリンを外用した。その結果、5名中3名は左腋窩、左鼠径部にグレード2の皮膚障害を生じたが、右側は皮膚障害を生じなかった。外用による有害事象はなく、予防的なステロイド外用はEVによる皮膚障害発生予防になると思われる。

一言コメント

「間擦部に対するstrongestのステロイド軟膏1日2回、4週間継続は、皮膚萎縮などの有害事象が出そうである。もうちょっと弱くても、あるいは1日1回でもいいのではないかと思ったが、それらの追試はされていないとのことだった。」